金糸の煙草

2

金糸の煙草　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19113493

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, 攻めがピンサロ行きます, 電気責め, 特殊清掃現場

ヨシ霊です。師匠総受けです。暴力描写は含む予定です。今回は少し電気責め（本番なし）を含みます。攻めが手コキのみですが風俗行きます。特殊清掃現場もあります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

金糸の煙草　2

まずいことになった。このままではＡランクの超能力者が基地に乗り込んで来かねない。これは上長と相談しないといけなくなった。俺１人の判断で動いて、何か問題が起こればコトだ。
「あっちが食堂だから、メシ食わして貰っててくれ」
霊幻新隆を食堂に追いやって、俺は基地の通信室を借りて、防衛省情報本部の陸上幕僚監部調査部に通信することにした。
「コードネーム『ヨシフ』だ」
通信士に周波数を合わせてもらい、ヘッドホンとマイクで本部に呼びかける。
『こちら超能力者監視部隊隊長、渡辺１佐だ。トラブルか？どうぞ』
「トラブルだ。『レイゲン』周辺の超能力者に拉致がバレた。明日にも超能力者たちが動き出す可能性あり。どうぞ」
『……緊急作戦会議を立てる。結果は追って伝える。オーバー』
通信は切れた。お偉いさんたちでどうするか決めるのに、２時間はかかるだろう。俺も晩飯、食お。
食堂に行ったら。
「……そこで俺は人面犬の謎を突き止めるために、こう言ったわけだ！『お嬢さん、何か不可解なことが起こってるんじゃありませんか』……と！」
薄っぺらい検診衣を着た男が、夜勤の自衛官に囲まれてメシを食いながらくっちゃべっていた。
「ははは、面白いな、れーげんせんせー」
「ふっ……霊障ならこの天才霊能力者、霊幻新隆にまかせろ！」
「おー、戦場で死んだら先生ん所に化けて出っから供養してくれよ」
自衛官の軽口に、すっと霊幻新隆は真顔になる。
「……分かった」
その真剣さに自衛官は苦笑する。
「冗談だよ」

「でも、もし、本当に『行き先』が分からなくなったら」
ふわり、と優しく笑う彼の顔に。
「俺のところにきたらいいから」
目が釘付けになった。
「……ああ」
軽口を叩いていた自衛官も毒気を抜かれる。
あーこれはちょっと。
……まずいかもしんない。
俺は自分の中にある性欲の蓋の強度を確かめる。ここ最近の激務で緩んでるかもしれない。風俗行っといた方がいいかもしれないな……。
霊幻新隆の検診衣からのぞく白いふとももや、胸元に目が行くのは、もう、溜まってるからだろう。
そこまで考えて。
はた、と快楽責めにあっていた霊幻新隆の痴態を思い出したから、いよいよ俺はピンサロ行こうと決心を固めた。
自衛隊の基地の周辺には、男所帯の自衛隊員をターゲットにしたそういう店が数多くある。メシ食ったらそこ行こう。
俺は配膳を受け取って、霊幻新隆の向かいの席に座る。
「食い方きたなっ！！」
口の周りに食べかすをいっぱい付けた霊幻新隆に思わず叫んでしまった。
「え？そう？」
当の男は気にもせずにはぐはぐと巨大なハンバーグを口に運んでいる。
「もうちょっとなんとかしろよ……」
ため息をつきながらメシを流し込む。
「あんたこそもうちょっと味わって食べたら？」
「メシを早く食うのも訓練のうちだ」
「ふーん。もったいねえな、こんなに美味いのに」
ほんとに美味そうに食うな、コイツ。

そういやメシって美味いんだっけ。何故かそんなことを突然思い出

した。

「……ごちそーさん」
食事の盆を下げてさっさと席を立つ。上から連絡が来る前に休憩を済ましてしまわないと。
霊幻新隆はまだ食事をしながら、休憩中の自衛官たちと話している。
突然。
霊幻新隆のいる世界から、切り離されたような感覚に陥る。
嗚呼。
誰かと食事をして、食事に舌鼓を打って。囲むその、暖かい食卓。
俺は振り切るように足を風俗街に向ける。
あれは、俺が失うことを覚悟した世界だ。
あれは、俺が守ることを決意した世界だ。
だから。
俺に与えられないのは、仕方ない。
外出届を出して、妙に寒々しい気分でピンサロをやってるバーに入る。
「とにかく手コキが上手い嬢を頼む。さっさと済ましたい」
カウンターで金を払いながら指名する。
「タカ子で〜す♡今日はよろしくね♡」
……よりによって金髪の細身の女が出てきて頭を抱えたくなってきた。
「……さっさと手コキで抜いてくれ。あまり時間が無いんだ」
「基地のお客さんはそういう人多いよね〜。任せて♡」
薄暗い店内で錆びた金髪の女を見下ろしていると、本当に勘弁して欲しいのだが、どうしても霊幻新隆の姿がチラつく。
「ちゅーはいいの？」
「いらない」
舌を噛み切られたら困るからな。
「フェラは？」
「手コキだけでいい」
噛みちぎられたら困るからな。

この辺りは職業病だ。
「せめておっぱい見せてあげるね」
するりと下着を下ろす女の乳首を見て、そう言えば霊幻新隆の乳首は薄いピンク色だったなと思い出したから、もう、本格的に勘弁して欲しかった。
手際よくコンドームを被せた女の手コキに集中する。
「……気持ちいい？」
『あっ！やだぁっ、あああっ！』
イきそうになった瞬間に、不覚にも、目の前いっぱいに霊幻新隆の快楽に狂う痴態が広がって。
吐き出した精液はここ数年で最悪の後味の悪さだった。
「わー、いっぱい出たね〜！時間まだあるし、もう一回いっとく？」
「……いや、いい」
しばらく霊幻新隆の顔は見たくないな……。

※

『ヨシフはしばらく『レイゲン』の監視についてくれ』
「は」
翌朝、本部からの通信に絶句する。
「……了解しました」
しかし一介の自衛官の自分が他に言える言葉など存在しない。
通信室から研究棟に戻り、拷問部屋に向かう。
「あぅっ……あああっ！んうっ……あ、あ！」
また快楽責めにあってる霊幻新隆に、ギャラリーが増えていた。
昨日霊幻新隆と一緒に晩飯を食べていた自衛官だ。
「何してんだお前ら」
「あ、いえ……拷問なんて珍しいので、見学を」
自衛官たちの股間のテントに目を細める。
俺は心理学者の白衣組に近寄って、こそこそと話しかける。
「霊幻新隆は他人に性愛を感じさせやすいタイプの可能性があると思う」

「君もそう思うかい？たまに居るんだよね、容姿に関係なく性的に好かれやすい人間って」
「ハーフだからか？印象に残りやすいと思う」
「霊幻新隆の家系資料は取り寄せたけど、わかる範囲ではハーフやクォーターかは判別できなかったな……突然変異の可能性もある。アルビノとまではいかなくても、色素が薄い人間が突然生まれることはあるからね。なんにせよ、霊幻新隆に人が集まる原因にはなり得ても、超能力者ばかりが集まる原因にはなりえないよ」
それはそうか。
「いや待てよ……特に超能力者に性愛を抱かせやすい、という線はあるな。今日、家に帰すんだろう？周りの超能力者が霊幻新隆に欲情してないか、調査をよろしく頼むよ」
「……了解」
午前の快楽責めが終わったら、霊幻新隆は広報の車で調味市に帰すことになっていた。
しかし欲情してるかどうか、か。
どうやって調べるかねー。
ラッキースケベがラブコメ並みに起こることを期待するわけにもいかないし……。

と、思っていた時代が俺にもあった。

調味市に戻って。

「モブ！逆バニー喫茶に潜入除霊だ！！」
「ええっ師匠……アンタなんて格好して……」
Ａ－５影山茂夫、霊幻新隆への欲情を確認。

「芹沢！マッサージを教えてやる！なんか客から貰ったこのジェルでも使ってみよう！」
「……いやこれ何か呪いかかってますからね！？うわっ、さっそく呪われてエロい感じになってるしもー！！」
Ａ－４芹沢克也、霊幻新隆への欲情を確認。

「律くん！イソギンチャクの霊の除霊を手伝ってくれ！」
「ふ、ふ、ふ、服が溶けてますけど！？しょ、触手が……ああもう！！」
Ａ－５影山律、霊幻新隆への欲情を確認。

「テルくんっ……すまん、客から貰ったチョコに、何か入れられてたみたいで……」
「……っ、解呪しますから、ちょっとあっち向いててください」
Ａ－４花沢輝気、霊幻新隆への欲情を確認。

「エクボ？どうしたんだよじっと見て……あ、また取り憑かれてるんだな！？ちゃちゃっと食ってくれよ。待ってな、ネクタイ緩めるから」
「……ちょっと噛むからな」
Ａ－４上級悪霊エクボ、霊幻新隆への欲情を確認。

いやいやいやいや。なんだこの乱立しまくってるフラグは。霊幻新隆は中学生が夢見るエロいお姉さん♂なのか？報告書になんて書きゃいいんだよ。『やっぱり霊幻新隆は超能力者を惹き寄せるフェロモンを出している可能性があります』としか書けねえじゃねぇか。それに『それ以前に男性の性欲を刺激する特性を持っている可能性があります』ってのも付け加えないと……厄介だな。
実際、性的に霊幻新隆目当てのマッサージ客も何名か確認した。
ここまで来ると別の危険性も考慮しなくてはならなくなる。
痴情のもつれによる、市街の破壊だ。
今のところ超能力者たちは霊幻新隆を独占しようとはしていないみたいだが、誰かが独占しようとしたら一気に内乱状態になる可能性がある。
俺が上官なら。
そうなる前に、霊幻新隆を殺す。
だが、それが超能力者たちにバレたら？
Ａクラス１０人超が暴走状態で自衛隊に復讐してきたら、たかが人

間じゃあひとたまりもない。俺たち超能力者部隊が応戦しても、数時間も持たないだろう。自衛隊が抱えている超能力者は俺を含めてＢランクばかりだからな。火力が違う。
「じゃあどうするってんだよ……」
「何が？」
真隣から霊幻新隆の声が聞こえて文字通り飛び上がった。
「お前、どうしてここが」
「いやだってこのビル、屋上立ち入り禁止のはずなのに、この数日間、一日中タバコの煙が上がってるんだもんよ。ヨシフが見張ってるんだろうなー、と思って来たら本当にいて俺もびっくりした」
慌てて脳内で命令指示書をめくる。ターゲットとの接触は禁止されていなかった。状況に問題無し。
「何か分かった？俺たちが無辜の市民だって証明できそう？」
「うーん、まあな」
情報を漏らす訳にはいかない。
「そっか、ならよかった」
ふわりと俯き加減に笑う霊幻新隆に。
何故か彼が監視を『分かった』と言った時の事を思い出していた。
「ところでヨシフ、これからも俺の監視すんだろ？」
「……一般人に作戦行動は教えられない」
「ならラーメン食いにいかね？監視もできるし美味いもん食えるし、一石二鳥じゃね？」
絶句する。
なんだこいつ。
……しかし、フェロモン調査のためにも、できるならターゲットと行動を共にした方がいいかもしれない。
「ああ、いいぜ」
俺は軽く頷く。
……もしそのフェロモンが本当に存在して、それを濃く浴びてしまったら、俺がどうなるのか、良く考えもせずに。
霊幻新隆のいきつけだと言う店に入って、適当に注文する。
しかし、本当にメシを美味そうに食う男だな……。
「なんだよ、親みたいに食うの見張ってんじゃねーよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめる男に、そうか、こいつ庇護欲をめちゃくちゃ刺激してくるな、と気が付いた。
超能力者は一般人を下に見ると同時に、愛玩動物に近い『守らなくては』という庇護欲を抱く事が多い。霊幻新隆はそのあたりも刺激しがちなのかもしれない。
ますます厄介な男だ。
「一回お前は市ヶ谷に来てもらわないといけないかもしれないな……」
「東京の？」
「自衛隊の本部みたいなもんだよ。一介の兵隊が手に負える案件じゃねーわ」
また口の回りきったねぇし。俺は無意識にティッシュで拭いてはたと気がつく。
自衛官になるような奴は、そもそも庇護欲や父性が強い奴が多い。もちろん俺もご多分に漏れない。こいつと親しくなりすぎるとヤバい、と俺の中のスパイ三原則がガンガン警鐘を鳴らしていた。
「あー美味かった。じゃ、また明日な」
「いや何でだよ」
「会うかどうかは知らねぇけど、どっかで俺のこと見てんだろ？」
「……」
沈黙するしか無いが、こんなのほぼ肯定だ。
「あ、そうか。寝る時も俺のこと見張ってるんだよな？カーテン開けといた方がいい？」
「……」
な……
なんだこの関係……。
「じゃあなー、おやすみ」
アパートの前まで霊幻新隆を送って、その近くのビルの一室に入る。
双眼鏡で霊幻新隆のアパートの窓から監視するためだ。通信は通信で別の部隊がチェックしている。霊幻新隆がネットで訳の分からない映画のレビューを延々と見ていたので、チェックのために隅から隅まで読まなくてはいけなかった同僚が発狂しそうになっていた。

換気をしていた霊幻新隆は、窓を閉じていつものようにカーテンを閉めようとして、すこし躊躇ってから開けたままにしていた。
……どうやら俺の監視をやりやすくしてくれるらしい。ホント何だこの関係。
双眼鏡で覗いていると、霊幻は少し部屋の奥に引っ込み、

……服を脱ぎ始めた。風呂に入るらしい。全貌は見えないが、俯いた時に白い背中や、下着から足を抜くのがチラチラする。
……風俗もう一回くらい行っときゃ良かった……これから１か月は禁欲生活なんだぞ、勘弁してくれよ……。
……変な扉が開きませんように。あとは祈るしか無い。

※

「なーヨシフ、ちょっと仕事手伝ってくんない？」
翌日の夕方、また監視ビルに来た霊幻新隆にそんな事を言われて驚いた。
「はぁ？」
「これから除霊なんだけどさ、どうせお前ついてくるんだろ？ならちょっと手伝ってくれよ。人数いた方がいいんだよ、今回の依頼」
霊幻の後ろに物凄く不機嫌そうな憑依したエクボがいる。
「霊幻、お前政府に監視されてんのか？」
いやまあお前ら全員監視対象だが。
「そうだ」
霊幻新隆の代わりに俺が答える。
「お前らと親しすぎるからな」
その返答にエクボが舌打ちする。
「俺らのせいかよ」
「違うぞ。俺がお前らといたいからだ」
霊幻新隆が。
幸せそうに目を細める。
「俺がモブやエクボ、芹沢と一緒にいたいと思ってしまったから、超能力者を集めて何かしようとしてるんじゃないか、って疑われて

るだけなんだ。今はその疑いを晴らしてるところだから、エクボからもヨシフに言ってやってくれよ。俺は善良な市民だって」
「…………霊幻、またお前何かを１人で抱え込もうとしてねぇか？」
「ん？なんだよそれ」
「……いや、いい。あー、こいつな善良？な市民だよ。何の力もねぇ、ちっぽけな一般人だ」
俺は嫌な気分になりながらも、自分の中の諜報としてのスイッチを入れる。
「ほー。じゃあ自衛隊で実験体として貰っていっても何の問題も無いな？」
「……あ゛？」
「ちょうど超能力者と相性のいい被験体が欲しかったんだよ。霊幻さんはその条件にピッタリ──」
頑強な男の顔面が般若のような形相で俺の目の前に来る。
「……コイツに手を出してみろ。痛いじゃ済まない目に遭ってもらうからな。それに──シゲオを怒らせることになんぞ。よくよく言葉には気をつけるこった」
Ａ－４、エクボ。霊幻新隆への干渉で激昂、行動することを確認。
「いやそもそも俺の人権……」
霊幻がぶつぶつと文句を言っている。すまねえな、レポートがあるもんでな。流石に戦時下でもない現代日本で国民を実験体になんてできない。……よっぽどのことが無ければ。だからあくまでエクボを怒らせるためのブラフだ。あーあ、嫌な仕事だぜ。
「で、結局手伝ってくれるの？くれないの？居酒屋奢るけど」
……どうせコイツに監視でついていかなきゃ行けないんだし、行動を共にした方がいいか……。見失う可能性も減るしな。
ポケットの中の盗聴器とGPSのスイッチをこっそりオンにする。これで諜報部の連中には俺が何をするか伝わるだろう。

霊幻新隆とエクボと、古いアパートの外付け階段を登る。
「……人数が必要なら、芹沢や影山を読んだ方が良かったんじゃないのか？」

ふと気になって霊幻新隆に質問する。
「あー……ちょっと今回のは、子供には見せたくねぇっつーか」
そう言いながら、霊幻はアパートの管理人から預かってきたらしい鍵束でアパートのチラシでパンパンになってるドアを開ける。
ぶわ、と中から漏れ出る真っ黒な瘴気。そして……腐臭。
「殺してやる……殺してやる、クソ親父……！！てめえのせいで俺の人生はめちゃくちゃだ……！！」
真っ黒な人影が、苦しそうにもがく痩せ細った中年男性の首を絞めている。
「！！おい、早く助けねぇと……！！」
「いや」
駆け出そうとした俺を霊幻が止める。
「あれはどっちも生霊なんだ。１人の男性が、幻と怨念を生み出してる」
「は……？」
「あの息子さんがお父さんを殺したのは１か月前だ。でも息子さんは殺し損ねたと思い込んで怨念で父親の幻を作り出し、何度も殺してるんだ。何度も、何度も。それを繰り返しているうちに自分自身も瘴気の塊になってしまった。異臭がするから見に来た大家と警察が、手に負えないってウチに連絡してきたんだよ。昼間は普通に生活してるらしい息子さんが、家宅捜査しようとしたら悪霊みたいになるらしくてな」
「おい霊幻、俺様２ついっぺんには食えねえ。本体から食おうとは思うが、幻がどうなるか分からねぇから、その軍人さんに守って貰えよ」
エクボが口をがぱっと開けながら真っ黒な塊になった息子に駆け出す。
「……なんだてめぇらは！！人んちに勝手に入ってくるんじゃねえ！！」
こちらに気が付いた息子から出鱈目に真っ黒な塊が飛ばされる。
（……っ、ホワイトノイズ！！）
バリア代わりに白壁で俺と霊幻を守る。
「よし、食った！幻も消えたぞ！！」

エクボの声が響く。
黒い怨念が取り払われた下からは。
ごく普通の青年が、目をパチクリさせて呆然としていた。
「あれ？もうヘルパーさんが来る時間だっけ？」
そう言いながら青年は立ち上がって台所に向かい、パウチから介護食を皿に出す。
「父さん、今日は父さんの好きな卵がゆだからね」
うつろに笑いながら、青年は布団の上の父親だったものの口の辺りにびちゃびちゃとかゆをそそいでいく。
「すみません、あとはお願いしていいですか」
にこりと笑う青年に、霊幻新隆はにっこりと笑って皿を受け取った。
「葉ヶ割さん、警察の方が安否確認に来ていますよ。この部屋、お化けが出るから危ないんですって」
「ええ！？そうなんですか？親父、お化けとか怖がるから、困るなあ……」
「ええ。だから警察官に追っ払って貰いましょう。さあ、此方へ」
霊幻新隆に誘導されて、青年はアパートの外にサンダルで出て行く。
「確保」
待ち構えていた警官が青年に手錠をかけた。
「葉ヶ割信次さん殺害の容疑で、貴方を逮捕します」
「ええ？」
青年はきょとんとする。
「困ります。俺が逮捕されたら、だれが父さんの世話をするんですか？」
エクボも、霊幻も。警官たちも、辛そうに俯く。
「……こちらへ」
青年は警官に連れて行かれた。
「……あとは特殊清掃の仕事だ。俺は鍵を大家に返してから合流するから、エクボは先に居酒屋行っててくれていいぞ」
「……ああ」
エクボは後味悪そうに暗い声を出す。

「こうなる前に何とか出来なかったんかねぇ……」
思わず口からこぼれる。
「突発的な犯行だったんだろうな。温厚で父親想いの好青年だったらしい。でも、だからこそ、……苦しみに、誰も気付いてやれなかった」
霊幻が空を見上げる。街明かりで星の見えない空で、月だけがぽっかりと欠けて浮かんでいた。
「一瞬だけ殺意が愛情に勝った瞬間に、手を掛けてしまったんだろう。介護ってのは殺意を隠して育てながら愛情をすり下ろしていく作業だからな。……政治家が根本的になんとかしてくれないと、どうしようもないケースだよ。……ウチの相談所でこういうのを対処したのも今回が初めてじゃない」
なるほど。精神的に未熟な芹沢や、未成年を連れて行きたくないわけだ。
「……一本くれない？」
「あ？見ただろ俺の煙草は武器だ。一本でも無いといざという時困る可能性があるんだよ」
「ちぇ。じゃ、そこのコンビニで買って来るから、ちょっと待っててくれ」
コンビニ前の喫煙所で待っていると、ラッキーストライクを買った霊幻が包装を剥がしながら合流する。
「趣味悪ぃな」
「なんでだよ、縁起がいいじゃねぇか……あ、火がねぇや。貸してくれよ」
「んぁ……」
仕方ねぇな、とライターの蓋を開けようとしたら、霊幻がシガレットの先で俺のタバコの先端にキスしてきたから、固まってしまった。
密着した霊幻から香る、樹木のような匂い。ベッコウ色をした淡い色の長いまつ毛が、キラキラと月光を反射している。
「さんきゅ」
す、と霊幻新隆が離れていく。
おまえな。

そういうとこだぞ。
しばらく黙ってタバコをふかす。
「……線香の代わりにはなんねぇよなぁ……」
霊幻が月にかざすようにタバコを立てて持つ。
「……あの部屋にゃあ殺された親父さんの霊は居なかった。とっくに成仏してんよ」
「そっか」
霊幻は悲しそうに目を伏せる。
「殺されても、なーんも恨んでなかったんだろうな、息子さんのこと」
「……」
俺はただ黙って、美味いと思えなくなった煙草を、線香代わりにふかしていた。

※

翌日、霊幻新隆は市ヶ谷の自衛体本部に呼び出される。
そこには自衛体名物のアスクルで１番安い横長のミーティングテーブルに、３人のお偉いさんがパイプ椅子でぎゅうぎゅうに座っていた。それに対するように霊幻用のパイプ椅子が置かれていて、俺はその後ろに休めの姿勢で立っている。
「……あなたに危険行為の意思も意図も無いことは分かりました。ですが、国としては危険な超能力者を野放しにはできません。よって、Ａクラスの能力者に爆弾を埋め込む事で危機管理をすることとしました。それで、その起爆スイッチを霊幻さんに託すのが最適かと……」
「いやいやいや待て、お前らの言ってることめちゃくちゃだぞ」
案の定というか、霊幻が反論し出した。
「お前らエクボのこと忘れてない？幽霊にどうやって爆弾埋め込むつもりなんだ？というか効果あるのか？幽霊に爆弾」
お偉いさんは黙り込む。
「それに、本当に超能力者が爆弾で死ぬと信じてるのか？」
ざわ、とお偉いさんが耳打ちを始めた。

「爆発をバリアで体内で防がれたら？そもそも念動力で取り出されたら？お粗末すぎるだろう、その方法は」
「……しかし、何らかの手を打っておかなければ……」
ビッ、と霊幻が自分を親指で指差す。
「俺に爆弾を埋め込めばいい」
「「「「は？」」」」
俺からも声が漏れてしまった。
「あいつらは俺を慕ってる。だから悪いことをしようとしたら、『お前の大事な霊幻さんが爆発して死ぬぞ』って脅せば言う事をきくだろう。俺は何の力も無い一般人だ。爆弾を取り出すことも出来なければ、抵抗することもできない。これならエクボも言う事を聞くだろう。どうだ、この妙案！」
絶句する俺に、ざわめくお偉いさん。
「それは……助かりますが、あなたはそれでいいのですか？」
「ん？いいよ」
それはあの『分かった』と同じニュアンスを含んでいて。
俺はなんとも、辛い気持ちになった。

帰り道。

「……帰ったら、まず芹沢やエクボに、お前の心臓付近に爆弾が埋め込まれたこと、伝えねぇとな」
「は？言わねえよ。あいつら気ぃ使っちゃうじゃん。俺はあいつらには普通の生活を送って欲しいんだよ」
「はあ！？それだとお前、あいつらが出来心で悪いことしたら、自動的に死んじまうんだぞ！？！？」
「大丈夫だよ。あいつらは絶対人を傷付けるようなことはしない。それに

俺は俺が死んでも悲しくないから」

その言葉は余りにも尊い自己犠牲を含んでいて。
俺は自衛官として生きていくと決めた時の事を思い出す。
公園で遊ぶ子供。
学校に通う学生。
道端で話す老人。
俺はその誰にも感謝されずに野垂れ死ぬことになっても、こいつらを守るために命を賭けるのだ、と。
「霊幻……」
なんの力もないこの胡散臭い男がさっき守ったのは、無辜の超能力者たちだ。
そう思うと、もうダメだった。
超能力者の俺が、心の奥で叫んでいる。

おい兄弟、多分、超能力者を守ろうなんて奇特なやつは、世界中でこいつだけだぞ！
欲しいと思わねえのか！
お前の気持ちを分かってくれるだろう、このどうにでもできる一般人を！

俺はその声に無理矢理蓋をする。欲望に蓋をするのには慣れている。
ただ、報告書に書かなきゃいけない文言にため息が出る。

『俺も霊幻新隆に恋愛感情を抱きました』

……よりコイツへの監視の目は厳しくなるだろうな。

続